



一四二九年四月、オルレアンの解放に向うジャンヌ・ダルクの軍勢は、ロワール川に向っていた。向う岸がオルレアンだ。しかし歴戦の兵士たちは、始めからジャンヌのような「小娘」に従う気などなかった。それどころか、このいくさを本気でしようとは考えていなかった。だからジャンヌをだまして迂回し、オルレアンの対岸から東に八キロも離れたシエーに連れていったのだ。烈火のように怒り、直ちに攻撃を命ずるジャンヌ。しかし誰もとりあわない。しかも風は向い風、川幅は一キロ近くある。「冗談じゃない、この程度の兵力でまともにぶつかったらわれわれは全滅だ。それにこの風でどうやって船を出すんだ」ところが！ジャンヌが川辺に立って剣をぬいたとたん風が変り、軍旗は逆の方向にはためいた。ジャンヌを見る目が変った。たちまち準備が整い、総勢はいつきにロワール川を渡りきった。その日の夜オルレアンは落城。ジャンヌの軍勢は、市民がかかげる松明の火と歓呼の声のなか、市の城門をくぐった。

風が変りはじめた

歴史は、時として、些細なきっかけで、その瞬間にたちあつて、当事者たちの意識や意図をこえて、いつべんにその流れを変えることがある。ことに、政治的・経済的・社会的な矛盾が堆積し、嵐の前に風が雨雲を吹き集めているような時代の転換点にあつては、その矛盾は、突如として沸騰点に達する。

風が吹きはじめた。少しづつ世の中が変りはじめた。われわれは、九四年の闘いのなかで、敏感にそのことを感じとつた。日比谷野音をうめ尽した十一・五集会、そして七十二時間ストの手応え、沖繩・宜野湾に結集した八万五千の波。この十年、国鉄分割・民営化攻撃の開始以来、労働者は、地に落としめられた存在として扱われてきた。しかし、歴史的反動期は終焉し、労働者の怒りが地鳴りのように響いている。

悲鳴が聞こえる！

大失業時代が到来しようとしている。「雇用破壊」「賃金破壊」は、資本主義の悲鳴だ。声をあげてうめいている。支配を維持することができなくなった支配者たちは、どこまで行っても出口の見えない暗闇のなかで亀裂を深め、抗争を繰り返すしかない。強権に訴えれば訴えるほど、その基盤は揺らぐ。昨日も今日もおとなしかった労働者が明日もおとなしくしているとは限らないからだ。阪神被災地の労働者の闘いは、来るべき大失業時代に抗する労働運動の再生の道すじを照らしている。沖繩の島ぐるみの闘いは、体制の根幹、日米の戦争政策の根幹を揺るがしている。そして、われわれのこの十年間の闘いも、労働運動の連合支

1.13 動労千葉団結旗幟を！

配をくい破る炎となつて燃え上がるうとしていく。

世界中で労働者が

労働者が、世界中で起ちあがつている。国鉄労働者を先頭としたフランスのゼネストは、一カ月にわたつて、交通機関をはじめ都市機能をストップさせている。この波がヨーロッパ全体に拡大しはじめている。フランスの新聞によれば、工場や街頭に、「今や革命しかない」という声があふれているという。変化への渴望が時代の精神となり、抑えられてきたエネルギーが、至るところで噴きだそうとしているのだ。

嵐もつと激しくとどろけ。われわれは全国にはばたく。甦れ労働組合！ とり戻そう労働者の団結！

「JR体制」が揺らぎはじめた！

JR体制がついに分裂した。風穴があきはじめた。太陽が蔽いかくされたようなJR体制のなかで、十年間、われわれが挑みつづけた闘いが情勢をこじあげはじめた。いかに困難であろうとも、労働者は団結を守つて闘うしかない。われわれは、頑なにひとつの道を信じ進んできた。十年を経て、矛盾を抱えきれなくなったのは敵の側だったのだ。

国鉄の分割・民営化政策の破たんは、もはやとり繕いようもない。「十年目」という時限爆弾が鉛のように重くのしかかり、彼らの間に深刻な亀裂を生みだしたのだ。今年の春、遅くとも夏までには、だしようのな

い方針を策定しなければならない。運輸省には、「平成九年度問題特命チーム」という危機感に満ちた名前を冠されてプロジェクトが設置された。運輸省に見れば、この間、先へ先へと繰延べてきた一切の問題に全て蓋をしなければならぬのだ。採用差別問題をはじめとした膨大な国家的不当労働こわいの問題、JR東日本とJR総連・革マルの異様な癒着体制もそうだ。これこそ、分割・民営化政策の最大の暗部である。もはやメスを入れる以外ないという判断だ。

歴史を動かそう！

JR体制という自らの存立基盤が土台から崩れ落ちようとしている事態のなかでJR総連は、唯一の延命の道を国労解体に求めている。「闘おう国労解体を！」これが、とどのつまり彼らがゆき着いた最後の方針となった。自ら進んで奴隷の道に落ちた者には、結局奴隷の運命しか待つていなかったのである。

今年、国鉄闘争は、JR総連・革マル問題を焦点として、大きな衝突がはじまることは間違いない。解雇撤回・清算事業団闘争勝利に向けた闘いははじめ、この十年にひとつの決着をつけるべきがこようとしている。九六年をJR体制打倒の年としてよう！労働運動の新しい潮流を創りあげよう！労働者の力こそが歴史を動かす！確信をもって進もう！

一九九六年一月一日

国鉄千葉動力車労働組合
執行委員会一同